

## あとがき

何年にもわたる紆余曲折を経て、本書は完成した。今から20年以上前、筆者が大学院に入って、最初の研究課題として選んだのが、本書のテーマであるニューディールと1935年社会保障法であった。当時はまだ修士論文の作成段階で、アメリカへ一次史料の収集に行く大学院生はほとんどおらず、筆者も国内で入手可能な研究書とアメリカ連邦議会の議事録などの史料を用いて、何とか1935年社会保障法の制定過程を追い、このテーマで修士論文を書いた。今から考えると非常に稚拙な論文ではあったが、とりあえず、このテーマで研究者としての第一歩らしきものを踏み出した。

その後、博士課程に進学してから渡米する機会に恵まれ、アメリカの大学院では、第二次世界大戦期の女性労働という全く異なるテーマに研究対象を変えて、博士論文を執筆することになった。そのため、ニューディールに関する研究からは遠ざかってしまった。けれどもその間、いつか必ずこのテーマに戻ろうと心に決めていた。というのも一度始めたことを途中で放り出すことができない性格であることと、大学院時代に熱心にご指導いただいた先生方、特に指導教授であった故平井規之先生、サブゼミでいつも貴重な助言をしてくださった故本田創造先生、油井大三郎先生に申し訳ないという気持ちがたいへん強かったからだ。

2003年に前著『軍需産業と女性労働—第二次世界大戦下の日米比較—』を刊行した後、再びニューディールと1935年社会保障法について、もう一度、最初から勉強し直すことにした。今度は、連邦レベルでの立法過程のみならず、このテーマに多角的にアプローチすることを心がけ、ひとつひとつ論文を仕上げれば、学会誌等に投稿するというプロセスを繰り返した。

本書のベースとなった論文の初出は、以下の通りである。

序論 書き下ろし

第1章 書き下ろし

第2章 「1932年ウィスコンシン州失業補償法とニューディール—『ウィスコンシン派』の思想とラフォレット知事による州政治を中心に—」『社会経済史学』第73巻6号, 635-656頁, 2008年5月.

第3章 「母親年金から児童扶助へ—1935年アメリカ社会保障法とジェンダーに関する一考察—」『ジェンダー史学』第3号, 45-56頁, 2007年10月.

第4章 「エイブラハム・エプスタインと1935年社会保障法の制定」『歴史人類』第37号, 130-154頁, 2009年3月.

第5章 「1935年社会保障法と健康保険をめぐる議論—エドガー・サイデンストリッカーとI・S・フォークの構想を中心に—」『アメリカ研究』第45号, 19-38頁, 2011年9月.

第6章 「直接救済・社会保険・公的扶助をめぐる相剋—1935年社会保障法のヴァージニア州への導入を中心に—」『アメリカ経済史研究』第2号, 1-21頁, 2003年3月.

結語 書き下ろし

それぞれの論文は、本書の出版に際して大幅に加筆・修正した。当初、論文に記載していた細かい統計などは、必要最低限なもの以外は削除するとともに、アメリカ史を専門としない人にも読んでもらえるよう、各所に説明を加えた。また、序論で提示した本書の大きなテーマに各章がどのように関連しているのかが明確になるよう、特に各章の最初と最後を大きく変えた。

これらの初出論文は、学会報告をした後、それをもとに活字にしたものが多く、筆者の拙い報告に貴重なコメントや質問をしてくださった皆様に感謝したい。また、時間をかけて丁寧に査読していただいた社会経済史学会、ジェンダー史学会、アメリカ学会、アメリカ経済史学会の学会誌編集委員会の方々にも御礼申し上げたい。

それぞれの論文を作成するにあたり、アメリカ各地の図書館や文書館を訪れ、たくさんの方にお世話になった。なかでも、ワシントンDCの国立

公文書館、シカゴ大学図書館、ウィスコンシン州歴史協会図書館、ウィスコンシン大学マディソン校図書館、コーネル大学キールセンター、イエール大学図書館、ヴァージニア州立図書館、ウィリアム・アンド・メアリー大学図書館、ヴァージニア大学図書館では、限られた日数で効率的にリサーチができるようご配慮いただいた。

アメリカで一次史料を収集するに際して、2003年度にはフルブライト奨学金を得ることができた。また、科学研究費「アメリカにおける社会保障思想のトランスナショナルな伝播に関する歴史研究」(2009-2012年度、基盤研究(c)研究課題番号：21520734)も海外での史料収集を可能にしてくれた。

本書の出版にあたり、筑波大学出版会の編集委員会から何度も貴重なコメントをいただいた。出版事情の厳しい折、こうした書籍の出版を引き受け、編集にご尽力いただいた筑波大学出版会の安田百合さんと久保田一弘さん、丸善プラネットの担当諸氏に深く謝意を表したい。

最後に、単身赴任者としてつくばと福岡を忙しく行き来している筆者を、いつも励まし、暖かく見守ってくれる夫、クリストファー・W・A・スピルマンに感謝したい。

2013年3月26日

佐藤千登勢